

5 歳児における擬人化オブジェクトと無生物に対する共感との関連

二階堂 寅翔

想像上の仲間は、他の人との会話や遊びの中で名前を付けて言及されたり、直接遊んだりするような目に見えないキャラクターである。擬人化オブジェクトは最近になって想像上の仲間の一つとして考えられるようになった存在であり、擬人化オブジェクトの保有とは、児がぬいぐるみなどの無生物をまるで人間としての性質を持っているかのように話しかけたり、遊んだり、お世話をしたりしているような状態を指す。

想像上の仲間を保有している児は感情理解の得点が高く、心の理論の獲得が早いなど、認知的共感が高いことが明らかになっている。しかし、想像上の仲間についての研究は西洋が中心となっており、日本国内での研究は少ない。

擬人化オブジェクトについての研究は、主にストレスの緩和やケアとしての役割を調べるものである。擬人化オブジェクトを保有する児の性質そのものについてはまだまだ研究が進んでいない。

共感とは他者の心の状態を推測、理解してその行動を予測するような認知的共感と、他者の心理状態を感情的に共有する、あるいは身体反応を伴って同期するような情動的共感に分類される。児の共感性と心の理論、向社会性にはそれぞれ正の相関があり、共感性が高い人ほど、痛みや悲しみの中にいる人に対して、その苦痛を軽減するための慰め行動を行うような向社会性が高い。

本研究の目的は、①日本国内の児における擬人化オブジェクトと見えない友達の保有率を調査し、その詳細について検討を行う、②擬人化オブジェクトを保有する児の無生物に対する情動的共感を調査する、③擬人化オブジェクトを保有する児の慰め行動から無生物に対する認知的共感を調査するであった。また擬人化オブジェクトを保有する児は無生物に対して人間性を見出して関係を築いているため、より無生物に対して高い共感性を示すという仮説を立てた。

実験に先駆けて認定こども園の年中クラスの 5 歳児 72 名(男児 29 名, 女児 43 名)の保護者に対して擬人化オブジェクトと見えない友達の保有に関する質問紙調査を行った。以降の実験は、保護者が質問紙に回答した児を対象に実施した。

本研究の実験は認定こども園の年中クラスの 5 歳児 40 名(男児 11 名, 女児 29 名, 平均年齢 61.1 ± 3.3 カ月)を対象とした。実験は、20××年 11 月 5 日から 20××年 11 月 29 日までの間に行われた。

各児に対し、以下の課題を実施した。ケガをしたぬいぐるみに対して、感情を同期できるかどうかという観点から、無生物に対する情動的共感を測定するために情動的共感課題を行った。また、実験者効果を排除した状態での向社会行動から無生物に対する認知的共感を測定するために、慰め課題を行った。

本研究の結果、擬人化オブジェクトを保有していた児の割合は全体で 45.0%となり、男児では 18.2%、女児では 55.2%となった。また、擬人化オブジェクトの保有経験と無生物に対する認知的共感、情動的共感はいずれも関連がないことがわかった。

本研究の結果から、擬人化オブジェクト保有経験の有無は児の無生物に対する共感に影響を及ぼさないことがわかった。この結果から、①擬人化オブジェクトを保有する児は特定のオブジェクト以外には共感性を示さない。②擬人化オブジェクトを保有する児であっても、無生物は無生物であると割り切っているために、その共感性を發揮しない。の 2 つの可能性が考えられた。(比較発達心理学)